

Contents

2	TAKACHIHO News ICE2010開催	12	TAKACHIHO Report 就職活動情報
3	Message 新春 理事長 藤井 耐 年頭のご挨拶 一目標設定と継続的努力ー 学長 成田 博	14	TAKACHIHO History 我が学問を振り返る
4	TAKACHIHO News 中国・中央财经大学における共同研究報告	15	New Books & Review 書籍紹介
5	TAKACHIHO Report 実行委員長として挑んだ 「初年次教育学会第3回大会」を終えて	16	TAKACHIHO Information 定期試験の注意事項 情報メディアセンターからのお知らせ
6	Seminar Information ゼミナール紹介	17	TAKACHIHO Report 平成22年度秋学期学友会総会
8	Seminar Information ゼミ発表会を終えて	18	New Director Profiles 学友会 新役員紹介
10	TAKACHIHO Report 平成23年度入試関連状況報告 平成22年度オープンキャンパス結果報告 平成22年度募集活動報告	20	TAKACHIHO Report 学友会コーナー
		22	TAKACHIHO Information 高千穂同窓会 父母の会 編集後記

TAKACHIHO News

ICE2010開催

平成22年12月11日(土)本学タカチホホールにおいて、「International Communication Event 2010(ICE2010)」が開催されました。

このイベントではECB(外国語)の授業において各クラスから選抜された学生による英語のスピーチコンテストと、IBCS(国際ビジネスコミュニケーション・セミナー)プログラムに参加した学生と台湾東呉大学研修学生による報告会が行われました。当日はECBの受講学生を始め、外国語系列の教員や発表学生の父母などが招かれました。成績優秀者は成田学長より表彰され、賞状と副賞が授与されました。

参加した学生達は、イベントを通して語学に対する学習意欲や、IBCSプログラムへの興味が沸いたようでした。



ECB発表学生と指導教員



満席の聴講者



IBCSプログラム参加学生と木村先生



台湾東呉大学研修学生と安本先生



IBCS米国調査研究報告

新春

平成23年(2011年)元旦

理事長

藤井 耐



慎しんで新年の御挨拶を申し述べますと共に、本年も皆様のご健勝、心より御祈念申し上げます。
 今年は「兎年」、私事で恐縮ですが、「兎」で思い出されることの1つに、今から55年前（昭和31年）小学校1年生、学芸会にて「因幡の白兎」が上演演目となり、多分担任が決めたこととは思われますが、私は「白兎」を演ずることになりました。今でも鮮明に記憶している1コマは、対岸に渡るため鰐鰯達を騙した結果、皮を剥かれ泣き伏している所に大黒天（大国主神）が現れ、蒲の穂綿にくるまり回復した折、鰐鰯を騙した事への戒めを受けている場面です。今、改めて考えてみますとあまり喜べる役回りではなかったのかも知れません。この神話（古事記）の意味・粗筋もわからない「無邪気」な7歳の児童に演じさせるとは……。

ところで、昨年（平成22年）3月、中学卒業（15歳）以来45年ぶりに故郷、（西）伊豆にて還暦同窓会が開催され出席して参りました。55年前の「無邪気」な顔が、一瞬にして皆、玉手箱を開けた「浦島太郎」と化していました。

さて、約45年程前、私達団塊の世代における大学進学率は12～13%でした。又、現在の大学生の親御様の世代である50歳前後の方々の大学進学率は、約22～23%でした。しかし、御承知の通り、今日の学生達の大学進学率は50%を超える時代となりました。これは、形式学歴主義の終焉を意味しているのです。一方、国内経済・市場は成熟化を迎え、企業の採用動機は今後とも低調な状況が続くことでしょう。

この種の状況下において、今日及び将来の学生達は、知的にも、人格的にも、より成熟した青年としての資質が求められているのです。本学もこの10年間様々な教育改革を進めて参りました。学生たちにも今後ともさらなる継続的努力を実践されるよう切望致します。

本年も充実した高千穂生活をお送り下さい。

年頭のご挨拶

—目標設定と継続的努力—

学長

成田 博



新年明けましておめでとうございます。

本年も高千穂大学の学生諸君ならびに高千穂学園・高千穂大学・高千穂幼稚園の関係者の皆様にとって、実り多き一年となりますことを心よりご祈念申し上げます。

平成19年4月に人間科学専攻と児童教育専攻から構成される人間科学部が本学の第3の学部として設置され、今春、平成23年3月に第1期の卒業生を送り出すこととなります。児童教育専攻は定員が20名と少ない中、ほぼ半数の学生が4月から各地の小学校教諭として教壇に立つこととなりました。第1期生としての誇りを持って努力を重ね、見事難関を突破して当初の目標を実現したことに対して敬意を表します。また、高千穂大学からの新たな領域へと巣立つ先駆者として、人間科学部すべての卒業予定者がそれぞれの職場にて着実な一歩を踏み出してくれることを期待しています。学生諸君は新たな年のスタートを機会として、目標をもって継続的な努力を重ねることの大切さ、この自明のことをあらためて確認してください。

高千穂大学は本年度で3学部体制が確立しました。学問領域の相違はあっても、高千穂大学に集う一人ひとりの学生が多様な「力」を身に付け、人間的にも大きく成長してくれることを願ってやみません。そのために必要な教育に関する諸施策およびその改善を実行することを私自身の目標とし、今年一年、継続的に努力することをお誓いして年頭のご挨拶といたします。

中国・中央财经大学における共同研究報告

中央财经大学と本学・アジア研究交流センターとの共同研究は、1998年に始まり、今年で13年目を迎える。当初は、会計・監査制度や法人課税制度、財政制度に関する研究が進められてきた。2004年以降は、従来の会計制度に関する研究に加え、新たに「中国の経営管理およびその組織管理」をテーマにしたプロジェクトをスタートさせた。2004年から2006年の研究成果は、既に『企業成長に関する日中企業比較』（白桃書房）として刊行されている。2007年からは3年間の継続研究として、「グローバル企業における経営戦略と経営課題－特に本国親会社と海外現地子会社間の経営問題を中心に－」がテーマとして設定された。昨年度はプロジェクトの最終年度にあたり、『アジア研究』No.11（高千穂大学アジア研究交流センター）に、その成果が盛り込まれている。

さて、新たに始まったプロジェクトの研究テーマは、「日中間における中小企業研究」である。今回、中央财经大学で開催される共同研究会に出席するため、平成22年10月20日（水）から22日（金）にかけて、本センターの研究メンバーである藤井耐理事長・教授、新津重幸理事・教授、中島聡客員教授（明治乳業株式会社

リテール・マーケティング部部長）、恩蔵の4名が訪中した。

訪問側が発表する慣例となっているため、今回は、本学・研究メンバーからの研究報告となった。藤井教授からは「中小企業経営研究にみる具体的分析対象領域－日中比較研究の視点から－」、新津教授からは「日本の中小企業を取り巻く現状と留意事項20」、中島客員教授からは「再編寡占化が進行する中での中小卸売り業のビジネスモデル～独自性と専門性に着目して～」、恩蔵からは「日本における損害保険と中小企業」について研究発表が行われた。発表後には、中央财经大学の研究メンバーによる質問が相次ぎ、大変活発な意見交換がなされた。

毎回、訪中の際には、李俊生副校長・教授、蔡彩時国际合作处处长・副教授、周衛中大学院管理部副部长・教授らをはじめ中央财经大学の研究メンバーから大変温かいおもてなしを受けるが、今回は、王広兼校長とも歓談することができ、本学と中央财经大学との交流はさらに深まったものといえよう。

アジア研究交流センター長・教授 恩蔵三穂



実行委員長として挑んだ 「初年次教育学会第3回大会」を終えて

経営学部教授 笹金 光徳

初年次教育と高千穂大学

その言葉の響きから「初年次教育」を「当該組織に所属して1年目に受ける教育」のことであろうと推測するかもしれませんが、ここ数年で社会的に認識されるようになった「初年次教育」という言葉には、もっと特別な意味があります。

中学校・高等学校は「中等教育機関」と呼ばれ、さまざまな学問領域についてその基礎を修得することを目的としています。そして、「高等教育機関」である大学においては、学生の選択した「学部」によって特徴づけられた学問領域（＝専門領域）を中心として中等教育より高度な内容を学び、自ら研究し、知識・理解・思考力の向上を目指すことが求められます。しかるに、わが国における大学進学率が50%を超えるとなると、大学生のユニバーサル化という現象が顕著となり、「中等教育を基盤として高等教育によって素養を積み上げる」という構図が崩れるという傾向が起ってきました。すなわち、高等教育を受けるために必要な基礎学力・基礎的知識が不足している学生、高等教育を学ぼうという意識の希薄な学生、職業意識の未熟な学生、社会的協調性の乏しい学生が顕在するようになったのです。そこで、中等教育と高等教育をスムーズに接続するために意図された教育を施すことが必要だという認識が10年ほど前からわが国で起こってきました。そして、大学低学年次を中心として行うこの範疇に属する教育分野を、高等教育研究の専門家が「初年次教育」と名付けたのです。こういった趣旨から、必ずしも「初年次教育」イコール「1年次の教育」とは限定されません。入学前教育に含まれるもの、2年次に及ぶものもあるのです。

高千穂大学には高等教育研究を主領域とする専門家は不在でしたが、このような流れと同時期に当時学長でいられた藤井現理事長のリーダーシップのもとでフレッシューズオリエンテーションを含むゼミIを主体とする独自の教育体制が開始され、毎年改善提案を検討しながら今日に至っています。そして、このようにして組織化された当時他大学より先んじていた一連の教育システムに対し、高等教育研究の専門家から「まさしく代表的な初年次教育である」というお墨付きをいただいた次第です。

本学での大会開催

初年次教育学会は、設立して4年足らずの若い学会ですが、一昨年3月の同志社大学での設立総会、11月の玉川大学での第1回大会、昨年9月の関西国際大学での第2回大会に続く年次大会（第3回大会）の会場として本学が選ばれました。

大会は9月11日（土）・12日（日）の2日間で行われ、初日は、午前中の企画セッションにはじまり、午後には開会式、シンポジウム、総会、自由研究発表、懇親会と続きました。翌日は、午前中に企画セッション、午後には自由研究発表を行い、閉会しました。参加者は実数で過去の大会を上回る400人に達し、わが国における「初年次教育」への関心の強さを裏付ける結果となりました。また、実行委員会が設定したワークショップ9件と会員がテーマ設定し議論を交わす場となったラウンドテーブル5件から構成された企画セッション、53件に及んだ自由研究発表がいずれも過去最高の件数となりました。本学3号館を満員にしたシンポジウムでは、「初年次教育のリアリティから教育の質保証考える」と題して、成田学長による本学の報告を含む三大学の取組事例や報道関係者による解説を講演していただいた後、パネルディスカッションを行いました。ここでも他では得られない貴重な情報交換がなされたと確信しています。

細かい運営上の失敗は多々ございましたが、全体としては前大会に負けない充実した年次大会が実施できたと思っています。

最後になりましたが、大会を支えてくださった理事長・学長・両事務局長をはじめとする多くの教員・事務職員の皆様と学生スタッフとして大会運営に携わってくれた大学院生・学部学生諸君に心から感謝申し上げます。



初年次教育学会 Japanese Association of First-Year Experience at University and College

初年次教育学会は、初年次教育に関連する理論研究を行う高等教育研究の専門家と初年次教育を実践し事例研究を行う担当教職員の双方を中心的会員とし、初年次教育の浸透と充実、会員相互間の情報交換を目的として、平成20年3月に設立されました。会員数は、本大会開催時点で、個人会員413名、機関会員76団体、賛助会員15団体です。

なお、高千穂大学は設立時より機関会員であり、設立時より個人会員である筆者は発起人のひとりとして設立に携わりました。

ゼミナール紹介

- ①主な研究内容 ②このゼミに入って良かったと思う事や、辛い事は何か ③このゼミの特徴や他のゼミと違う点 ④これからゼミを選択する後輩へのメッセージ

テーマ

世の中にある「あらゆる」企業の経営活動の分析を通して、社会の構造や人間活動とは何かを学んでいきます。

小林 ゼミナール



○ゼミ員数：44名（男：35名・女：9名）

- ① ゼミ活動はおおきく二つに分かれ、2・3年生とも前期では基礎的なビジネススキルをつけることを目標とします。後期では、2年生はゼミ発表の準備を通して本格的に企業経営について研究していきます。3年生はこれまで身につけた知識やスキルを整理し、就活に備えます。
- ② つらいと思ったことは全くないです。とにかく楽しいゼミで、生徒との距離が近いというのはまさにこのことを言うんじゃないかというくらいフレンドリーです。小林ゼミのおかげで大学生活が楽しくなったのでホントに良かったと思います。
- ③ 小林ゼミの特徴は、就職活動を見据えたゼミ活動をおこなっているゼミである点です。しかし、ただ堅苦しい活動をしているだけではありません。個々の学生のことを考えながら、それぞれにあったプログラムをおこなってくれます。
- ④ 大学生活を少しでも楽しく過ごしたいと思うなら、ぜひ小林ゼミをお勧めします。それほど自信を持って言えるゼミです。きっと小林先生はあなたの大学生活を楽しくしてくれます。



ゼミ風景

テーマ

商業流通などの歴史について学び、卒業論文の構想発表とゼミ発表の役割分担を決定し、本番に向けて作業を進めていくことです。

水野 ゼミナール



○ゼミ員数：25名（男：25名・女：0名）

- ① 2年生は、『日本流通史』についての発表をしていて、3年生は、卒業論文に関する文献をテキストにして発表しています。
- ② 私たちが所属する水野ゼミは、商業流通の歴史について勉強しています。流通の歴史については、詳しく教えていただいたので、理解できるようになりました。辛い事は、授業で毎回ゼミ内発表をするので、予習が大変です。
- ③ 水野ゼミでは、商業流通の歴史について学んでいます。いろいろな歴史について興味・関心をもった個性豊かなメンバーが多く在籍しています。合宿では2・3年生がともに仲良くやっています。
- ④ 自分がやりたい事や興味があることを探して自分に合ったゼミを選択していくことがとても大切なことだと思います。



ゼミ風景

テーマ

家族社会学の考え方をベースに、昨年度は「婚活」と「男性の子育て」、今年は「結婚」をテーマに取り組んでいます。

吉原第一 ゼミナール



○ゼミ員数：11名（男：5名・女：6名）

- ① 昨年度のゼミ発表での課題を深めるため、今年度は1つのテーマ「結婚」にしばらく「結婚はなぜするのか、結婚のメリットは何なのか」などについて、取り組んでいます。本を1冊選んで各自が1章ずつレジュメを作って報告しながらスウェーデンやフランスなど諸外国の状況についても学び、日本と比較しながら研究を進めています。
- ② 個性豊かなメンバーがいて、グループワークなどを通じて学年、男女を問わず仲良くできることです。その他にも、資料の上手な探し方やレジュメやパワーポイントスライドの作成方法、プレゼンテーションスキルについて、丁寧に分かりやすく教えてもらえ、身につけられることです。
- ③ できてまだ3年目の新しい、少人数のゼミです。その分、手探りながら自分たちでゼミを作っていくことができ、先生との距離も近いので相談事などもしやすくアットホームなところが魅力です。
- ④ ゼミ選択は、大学生活において重要なポイントになります。私たちのゼミに興味があれば、ぜひ一度見学に来てみてください。「百聞は一見にしかず」です。



ゼミ風景

テーマ

ユーモアの力を「人生の質」に活かそう。

小向 ゼミナール



○ゼミ員数：14名（男：12名・女：2名）

- ① 「人間はなぜ笑うのか?」「ユーモアが持つ可能性と限界とは?」などについて考える「笑い学」(ユーモアオロジー)に取り組んでいます。
- ② 先生の「命令能力」が低い(笑)ので、自分たちで思いついて行動する能力が、いやでも高まります。
- ③ 「失敗を恐れて挑戦しない」や「今まで誰もやった人がいない」を口実にしない、ユーモア・センスを自分の味方につけた「拘りある自由人」になれることを目指しています。
- ④ ゼミでは先輩・後輩という縦の関係があり、ゼミ発表の機会などを通じて、他の授業では生まれない強い仲間意識が育まれると思います。



ゼミ風景